

児童虐待対策を中心に

日本社会事業大学学長・東京大学名誉教授

神野直彦

2019年4月17日

1. 「希望の島」へのアジェンダ

(1) 「子どもの詩」に学ぶ

子ども ドロシー・ロー・ノルト

批判ばかりされた 子どもは
非難することをおぼえる

寛容にであった 子どもは
忍耐をおぼえる

可愛がられ 抱きしめられた 子どもは
世界中の愛情を感じることを おぼえる

殴られて大きくなった 子どもは
力にたよることを おぼえる

賞賛を受けた 子どもは
評価することをおぼえる

笑いものにされた 子どもは
ものを言わずにいることを おぼえる

フェアプレーを経験した 子どもは
公正をおぼえる

皮肉にさらされた 子どもは
鈍い両親の もちぬしとなる

友情を知る 子どもは
親切をおぼえる

しかし、激励を受けた 子どもは
自信をおぼえる

安心を経験した子どもは
信頼をおぼえる

(2)社会の基盤としての家族関係

私たちは、学校、職場、余暇活動などで、さまざまなグループに属しています。しかし、私たちにとって最も大事なグループは、それがどんなタイプであるかにかかわらず、家族です。人々は「家族は、社会全体がその上に成り立っている基礎である」とやや重々しく表現します。

家族の中であって、私たちは親近感、思いやり、連帯感、相互理解を感じます。一方、そこには要求されるものもあります。お互いへの配慮や敬意、そして、家族の一員として家庭内の仕事を分担するなどです。家族にあっては、私たちはありのままにしながら、受け入れられ好かれていると感ずることが出来ます。たとえ馬鹿なことを言ったりしてもです。そういうことは、その他のグループでは決してありません。

スウェーデンの社会科の教科書『あなた自身の社会』より

(3)家族(共同体)関係の「分かち合い」の原理

①誰もが誰もに対して、不幸にならないことを願い合い、幸福になることを願い合っているという「確信」の存在



民主主義の基盤である親和的対立と親和的議論

②「分かち合い」の三原則

- 存在の必要性の相互確認
- 運命への共同連帯責任
- 平等の原則

2. 「社会保険国家」から「社会サービス国家」へ

(1) 工業社会の社会保障からポスト工業社会の社会保障へ銕直す

重化学工業を中心とする工業社会では、同質で大量の筋肉労働を必要としたため、主として男性が賃金を稼得し、主として女性が家族内で育児や高齢者ケアなどを担うという家族を前提にできた。

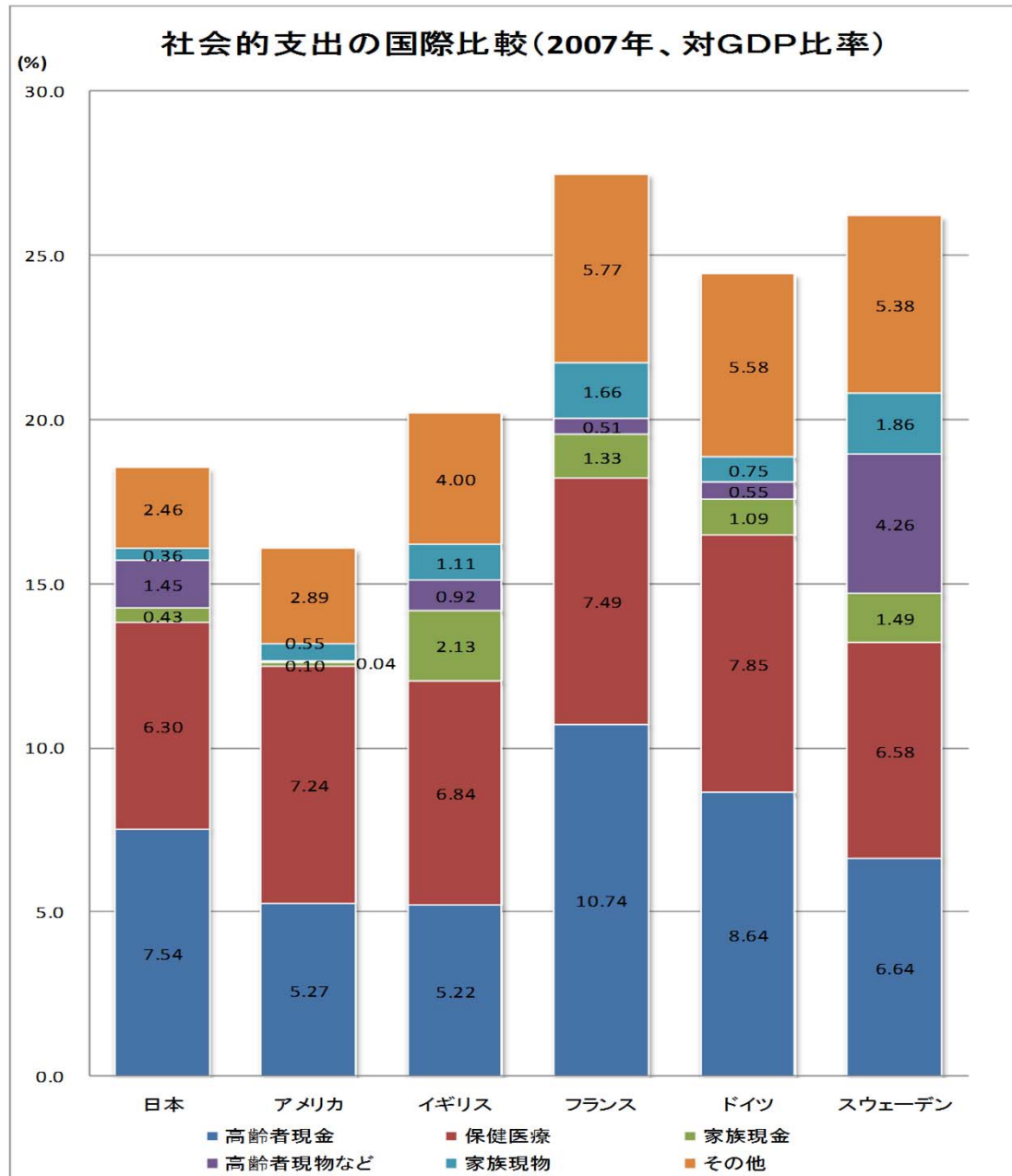
そのため高齢退職や疾病などの正当な理由で、賃金を喪失した時に賃金代替の現金を給付する社会保険で国民生活を保障することができた。



サービス産業や知識産業を中心とするポスト工業社会では人間の掛け替えのない多様な能力が必要となるため、女性の労働市場への参加が急速に進み、家庭内で無償労働に従事する女性が姿を消すようになる。

そうなると、育児や高齢者ケアなどの人的サービスを社会保障として提供しないで、ポスト工業社会の労働市場への参加を保障しないと格差と貧困に溢れてしまう。

(2)「社会サービス国家」へ舵を切れないでいる日本



出所:OECD "OECDStat."

http://stats.oecd.org/Index.aspx?DataSetCode=SOCX_AGG

大阪市立大学 水上啓吾氏作成

(3)「所有 (having) 欲求」から「存在 (having) 欲求」へ

—「豊かさ」から「幸福」へ

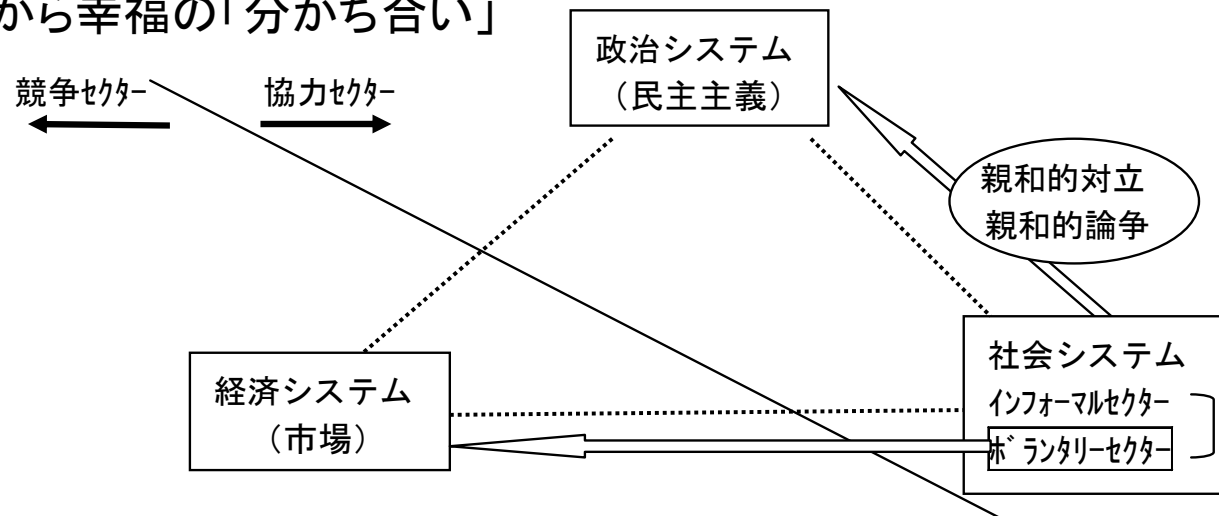
①存在欲求＝人と人、人と自然との関係で充足される欲求
＝幸福の実感

②所有欲求＝自然を所有することによって充足される欲求
＝豊かさの実感

(4)工業社会は存在欲求を犠牲にして、所有欲求を充足したのに対して、ポスト工業社会としての知識社会では人間の人的欲求である存在欲求の充足を目指す。

(5)所有欲求を充足する工業社会では「蓄える」ことが美德であっても、知識を生産するポスト工業社会では「惜しみなく与え合う」という共同体的人間関係が培養する精神的風土が美德となる。

(6)欲望の「奪い合い」から幸福の「分かち合い」



3. 「悲しみの分かち合い」としての社会サービス

(1)社会サービス(social service)を意味するオムソーリ(omsorg)の原義は、「悲しみの分かち合い」。

(2)社会サービスの二類型

①人間の個人としての機能障害への支援・代替サービス

→障害者・高齢者へのケアサービス

②人間と人間との関係の機能水準への支援・代替サービス

→児童福祉(child welfare)、児童保護(child protection)、家族政策(family policy)。

(3)ポスト工業社会への移行にともなって、家族機能の弱体化→脱家族化(defamiliazation)政策の展開→家族の関係性への支援・代替という認識が高まる。

(4)「子ども保護(child protection)モデル」

「家族サービス重視(family service orientation)モデル」

→「子ども中心(child-focused orientation)モデル」

子どもの権利を親の権利よりも高く位置づける。

(5)貧困や虐待から子どもを保護する→子どもの生育環境とウィル・ビーイングを向上させる。

→社会投資国家

4. 児童虐待への社会サービス

(1) 児童虐待への二つの道—子ども保護モデルと家族サービスモデル

(2) 子ども保護モデル

—虐待する近親者が与える心身的危害から子どもを保護する。

(3) 家族サービス重視モデル

—家族関係の機能障害と捉え、家族機能を回復するように支援する。

ファミリー・リハビリセンター、コンタクト・ファミリー、コンタクト・パーソン

(4) 子ども中心モデル

子どもを自立した市民—声なき声の民主主義



子どもをリスクから保護するだけでなく、子供の成育する環境や条件を整える。

→すべての子どもに生育する最善の機会や教育を保障する。

→社会投資国家 (social investment state)

(5) 多職種連携による保護→ポジティブ・ウェルフェアの包括的サービスを。

5. 児童虐待にかかわるモデルと政策

(1) 児童虐待における子どもと家族に対する国家の役割

	子ども中心モデル	家族サービス重視モデル	子ども保護モデル
介入のための観点	現在・将来的観点からの子どもの個別ニーズ、健康で貢献できる市民養成の社会ニーズ重視	家族総体のニーズの重視と支援	子どもに対して養育怠慢で虐待的な親（児童虐待）からの保護
国家の役割	善意に基づく配慮：脱家族化国家が親の役割を引き受けるが、養育里親ホーム・親族ケア・養子縁組によって家族再形成化を図る	親支援：国家は家族関係の強化を図る	制裁：子どもの安全を確保にする「番犬」としての国家機能
問題枠・背景	子どもの発達と子どもが得る不平等な結果	社会・心理学的（システム、貧困、人種差別など）	個別的・道徳的
介入方法	早期介入と調整・ニーズ査定	療法的・ニーズ査定	司法的・調査
介入目的	社会投資と／あるいは平等な機会保障による安寧・ウェルビーイングの促進	予防・社会的結合	保護・損傷軽減
国家と親の関係	代用的・協力関係	協力関係	敵対的
権利均衡（バランス）	子どもの権利と親の責任	社会福祉専門職者によって媒介される家族生活に対する親の権利	法的手段による強制的な子どもと親の権利

出所：(Gilbert, Parton & Skivenes, 2011b, p.255)

- 注：1.ストックホルム大学の訓覇法子氏作成
2.訓覇氏は福祉の国際比較研究において私との共同研究者である。

(2)モデルと福祉レジームとの関係

・子ども保護モデル

—福祉レジームでは自由主義福祉レジームのアメリカ、イギリスに代表される。

・家族サービス重視モデル

—社会民主主義福祉レジームの北欧諸国や、保守主義福祉レジームのフランス、ドイツに代表される。

注：日本とイタリアは福祉レジームの類型化は難しいとされる。

脱家族化という観点からすれば、社会民主主義福祉レジームが家族給付支出が最も高く、伝統的な家族の役割を重視する保護主義福祉レジームでは、家族給付支出は相対的に低い。自由主義福祉レジームでは家族給付支出が最も低い。

脱家族化のパラドックス—脱家族化が進んでいるほうが家族の連帯が強い。

(3)児童虐待への対応政策の国際比較

・国際的にみると、地域・在宅を基盤とするオープン・ケアの増加が指摘されているけれども、養育里親ケアなどの家族外ケアも減少しているわけではない。

・北欧諸国のように家族重視モデルを採るほうが、アメリカやイギリスのように子ども保護モデルを採るよりも、家族外ケアの利用度は高い。

・アメリカやイギリスのように子ども保護モデルを採る国では、実親との生活復帰が無理な場合には、養子縁組が最善と考えられている。逆に、フィンランドでは養子縁組は禁止となっている。

・「子ども中心モデル」はOECDやEUによって奨励され、1989年の「子どもの権利条約」以降、その理念の具体化として展開されている。

北欧諸国の子どもにフレンドリーな社会形成政策や、アメリカ、イギリスやドイツでも包括的な子ども中心プログラムが認められる。